

埼玉県腸管出血性大腸菌検出状況(2021年)

埼玉県で2021年に検出され、衛生研究所で確認した腸管出血性大腸菌は111株でした。

111株の血清型は、O26:H11が47株(42.3%)と最も多く、次いでO157:H7が29株(26.1%)、O156:H25が6株(5.4%)と続きました(表)。O26:H11は、保育園での集団感染事例の影響により、他の血清型に比べ多く検出されました。また、O156:H25の6株については、届出時にはO血清型不明とされていましたが、国立感染症研究所による詳細な検査の結果、血清型がO156:H25と判明しました。この血清型は全国でも約60株検出されており、例年より多い傾向でした。O156:H25は主に無症状病原体保有者から分離されたため、他県を含め喫食状況等の情報が十分でなく、現時点で感染原因は不明です。

毒素型については、O26:H11ではVT1単独産生株が46株、VT1,VT2産生株が1株でした。O157:H7ではVT1,VT2産生株が20株、VT2単独産生株が9株でした(表)。

検出された111株のうち、47株(42.3%)は、患者発生に伴う家族検便や給食従事者等に対する定期検便により、無症状者から検出されたものでした。特に、最も多く検出されたO26:H11では48.9%(23株/47株)が無症状者から検出されました。

表 検出された腸管出血性大腸菌の血清型・毒素型別検出数(2021)

血清型	毒素型			計
	VT1	VT2	VT1&2	
O157:H7		9	20	29
O157:H-		1	3	4
O26:H11	46		1	47
O26:H-	1			1
O111:H-	1		2	3
O103:H2	4			4
O156:H25	6			6
O177:H-		2		2
その他	8	5	2	15
	66	17	28	111

検出株については、MLVA法による遺伝子型別を実施しました。O157:H7は29株が23パターンに、O26:H11では47株が13パターンに分けられました。特にO26:H11では、集団感染事例の影響で、26株(55.3%)が特定のMLVA型に集積がしました。

施設における集団感染の拡大を防止するため、早期の探知と共に検診による感染状況の把握を適切に行うことが重要となります。